

命



www.columnland.net

球

命は地球より重い

というが、その地球上で

わずか十グラム程度の鉛球によつて、

人間の命はいとも簡単に失われてしまう。

恐るべきことに、命は銃弾より軽いのだ。

地球よりも重く、鉛球よりも軽い。

現実是不条理だ。

美しい月夜だった。武骨な自分には似合わない光だと感じながらも、男は通い慣れた道を歩く。月明かりに融け込めそうな人物、それには心当たりがあった。

「何をしている」

案の定、月光に浮かびあがった瘦身を見つけて、男は低く声をかけた。振り返った影が微笑んだであろうことを、男は長年の経験で知っている。

「聞かずともお分かりでしょう。兄上をお待ちしております」

影——男の弟は、通りの良い声でそう言った。

「今宵は冷える。体に障るだろう、屋敷に戻れ」

「その体のことで、少々お話が。頼み事があるのです」

反射的に「何だ」と返して、男はすぐに後悔した。弟が彼に頼み事をするのは、極めて珍しいことではあったが、同時にその頼みを断ることのできた例は無かったのだ。おそらくは最後の頼み事です、そう付け加えて、弟は凜として言った。

「この家に、父上と兄上に、一度は捧げたこの命。それを私に返していただきたい」
一瞬、月が雲に隠れて、お互いの表情は判らなかった。

「……何を、馬鹿な」

「願はくは 花の下にて 春死なむ」。そう詠んだ西行法師は、その望みを叶えて亡くなったそうです。美しいとお思いにはなりませんか」

男の困惑に気付かないのか、意図的に無視しているのか、弟は淡々と続けた。

「つまりは、死に方を選びたくなくなってしまったのです。今朝、とうとう発作が起きました。少しでも長生きを、と、こんな夜に私を心配してくれる兄上の気持ち、痛いほど感じていても、この命を自分自身のために燃やしたいのです」

不孝者ですね、と呟く弟に、そんなことはないと言ってやることすら、今の男にはできなかった。発作。弟が病に蝕まれて以来、ずっと恐れていた死刑宣告だった。

「最近紙の上で兵法を学ばばかりで……無論、それも兄上のお役に立つことがあると思えば嬉しかったのですが、ここは穏やかすぎるのです。何も為さぬまま、何も感じぬまま死んでいくのは嫌なのです。もうすぐ大きな戦があるでしょう。私も戦場へ、前線へ出たいのです。刀を握ることのできるうちに、この家の旗を掲げて」

止めても無駄であることくらい、男にはわかっていた。少しだけ声が掠れた。

「お前は、花卉の代わりに血飛沫の舞うような、あんな所で満足なのか……？」

「……そうですね。所の問題では無いでしょう。ただ、私が見たいのは、」

弟は笑った。遠い喧騒を懐かしむような、透き通った瞳をしていた。

「恐怖と、昂揚と、誇らしさ。感情の激流を、もう一度」

願はくは 旗の下にて いま死なむ

突然、ラジオ番組の音声途絶えた。故障かと思ひ、ラジオを持ち上げ、底をのぞきこんで、軽く叩いたりしてみたがどうも故障ではないようだ。六本木ヒルズの外資系企業で働く私は、もう5年ほど激務に追われている。休憩時間に聴くこのラジオ番組が唯一の楽しみであるというのに、とても嫌な気分になった。

「今から死んでやる!!!!!!!!!!!!!!」

・・・突然、ラジオから女性の高い声で叫ぶ奇声が聞こえた。私はひっくり返ってしまうほど驚き、再度ラジオを何回か叩いてみた。連日の激務のストレスで幻聴でも聞こえたのかと思つた。しかし、隣にいた同僚も驚いた顔をしてラジオの方に耳を傾けている。5秒くらい経たとき、ラジオが微妙に反応した。次の瞬間、この世のものとは思えないほどの奇声がラジオからきこえてきた。

「ぎゃあああああああああ! しんでやるううううう!」

驚愕して飲んでいた缶コーヒーを半分こぼしてしまった。一体何事なんだと、パニックになり他の同僚を集めた。その中の一人の同僚がテレビをつけてみると、ニュース速報がながれていた。なんと六本木ヒルズの屋上から一人の女性が自殺をはかうとしている姿を中継している。六本木ヒルズといえは、まさに私が働いてる職場ではないか! しかも、その自殺しようとしている女性の顔をよくみると、どこかで見覚えのある顔・・・

・・・佐藤マネージャー!?!?

目を何度かこすつて、何回も見直したが、どこからどうみても本人であつた。何人かがすぐさま階段をかけあがつて止めにいく。私は何をすればいいかわからないし、今おこっている出来事の整理すらつかずただつたつたっているままだつた。彼女は、都内の一流私立大在学時に公認会計士、米国公認会計士の資格を取得し、大手監査法人に勤務の後、自分と同じ会社に入社した人物である。彼女は職場では「マシーン」のあだ名がつくほど働く人であり、営業成績も入社1年目から常にトップ。マネージャーに昇格後、アメリカ本社に引き抜かれるという話まであがつたとても優秀な人間だ。また、彼女は学生時代から付き合っていた男性と大学卒業と同時に結婚。2人の息子もいる。なぜこの人が自殺など・・・と、思っていた時、警察が職場になだれ込んできた。パニックになつて、慌てふためいた。ラジオ回線をどうやっ

て占拠したのかを調べるために彼女のデスクを探っている。すでに家宅捜索も入っているらしい。警察が何人かの人間に、彼女が自殺するような動機が、日頃の話や行動で見たらなかつたかをきいていた。私はそのとき、ちょうど1年前に読んだ社会学者エミール・デュルケームの「自殺論」の内容が頭に浮かんできた。

自殺は個人的な原因による逸脱行為だと思われがちであるが、自殺率の統計を仔細にみていくと、社会状況にあわせて驚くほどの規則性が存在し、大きく分けて3つの自殺の型がある。統計をみていくと、未婚者のほうが既婚者より自殺率が高く、既婚者の中でも子供がいない人の方がいる人より自殺率が高い。また、国民的戦争の時代には自殺率は低下する。つまり、集団に包摂されている人間の自殺率は低下し、逆に孤独な人間ほど自殺しやすい傾向にある。これが1つ目の「自己本位的自殺」とデュルケームは呼ぶ。しかし、彼女は既婚者であり息子が2人もいる。しかも、友達も多く、仕事ができるので、ビジネス仲間も多い。この型に彼女は当てはまらない。「自己本位的自殺」とは逆に、社会集団に統合されすぎて、個人にその社会的重圧が重くのしかかり、自殺に及ぶ「集団本意的自殺」が2つ目の型である。殉死などがこれにあたる。確かに外資系企業はノルマがキツく激務であるが、実力に合わなければ、辞めればいいだけの話であるし、何より彼女は仕事ができ、いつも余裕だった。この型の自殺とも考えにくそうだ・・・つと、その時彼女が警察にとりおさえられたニュースが流れた。

3日後、警察が再び会社を訪れ、自殺の動機がきかされた。彼女は異常に向上心が強く、何もかもを望むあまり世の中のをすべてに満足できなくなり、自殺を図ろうとしたというのだ。その時、私は、3つ目の自殺の型について思い出した。社会が個人の欲望を押さえられなくなることによる苦悩により自殺する型である。この自殺の型をデュルケームは「アノミー型自殺」と呼ぶ。確か彼女は勝馬和代を目標にしていた、将来は自分の成功体験を本にしたいとか言っていたっけな・・・

現在、彼女はこの事件で罪に問われ実刑をくらつて服役中である。しかし、彼女は欲望にさらされない刑務所の生活をえらく気に入っているらしい・・・

4年

四人目

無機質に白いドア。その上に煌々と光る「手術中」の赤い文字。

かれこれ3時間、私は、この開かないドアの前で祈り続けている。

「どうか二人とも無事で、どうか…」

目を瞑り、ただただ祈り続ける私の脳裏に、妻との会話が浮かんた。

「この子は、いったいどんな子になるかしらね」

膨らんだお腹をさすりながら、妻が言った。

「君に似た、おもしろい子になるさすり続ける妻の手に自分の手を重ねて、お腹をさすりながら私は言った。

「あら…ふふふ。じゃあ、私は、あなたに似たおもしろい子になる」

私の方を見て微笑んだ妻が、幸せそうに囁いた。

「おっ、今、動いたんじゃないか？」

一瞬、手のひらに淡い抵抗を感じた気がした。

「もしかしたら、私たちの言葉が分かってるのかしらね」

目を細め、両手でお腹を包みながら、妻は言った。

「きっと、優しい子だよ」

お腹ごと妻を抱きしめながら、私は言った。

「そうね、きっとそうだよ」

抱きしめる私の腕に顔を寄せながら、妻は言った。

「再び目を開ける。真下に見えるリノリウムの床が、かすかに濡れていた。

私は泣いていた。言葉で言い表せない不安に、怯えていた。

もし、もし、妻たちに万が一のことがあったら…

「」

ふと、誰かに呼ばれたような気がした。ひどく、懐かしい声だった気がする。

「…オギヤア」

今度は、はっきりと聞こえた。

私は、思わずドアに駆け寄った…。

「たくちゃん、弟と妹、どっちが欲しいかな？」

「うーん、一緒に野球したいし、弟がいいかなあ」

「そう。じゃあ、ママ、頑張るからね。いい子で待ってるのよ」

ママと話をした後、ぼくは今、この広い待合室にいる。さっきまで。パパと廊下にいたけど、退屈だからここにきた。

その時、診察室から女の子とそのママが出てきた。女の子は腕を押さえながら、泣き腫らした目をしていて。

ママは女の子をぼくの目の前の席に座らせると、受付の方へと行ってしまった。向かいのイスにちよこんと腰かけたその子の手はちよこちよこ、きつとぼくより年下だ。

ふと気がつく、女の子はぼくのことうを上げかきにいじって見つめていた。こつちがみつめ返しても、瞳に涙を浮かべながら、じいっとぼくを見つめ続けている。

退屈だったぼくは、話しかけてみた。

「お怪我したの？」「…（ふるふる）」

「注射されたの？」「…（くくくく）」

「痛かったよね？」「…（くくくく）」

ぼくの質問にちいさく首を振る女の子は、前にテレビで見た子猫みたいで、かわいかった。

もし笑ったら、もっとかわいいんだろな、って思った。だから、ぼくは見つめ返したまま、へんな顔をしたみた。

「……？」

女の子は少し首をかしげただけだった。

「ごめんね、ななちゃん、待たせちゃったね」

突然、女の子のママがこちらに歩いてきた。女の子はママに促されてイスを降りると、手を引かれて歩いて行ってしまった。

…結局、笑った顔は見られなかったな…。

そう思いながら遠ざかる女の子を見ていると、女の子が突然振り返った。

「…（ばいばい）」

小さく手を振って、にっこりと笑いながら、女の子の口がそう動いた。

…妹でもいいな、と思った。

真上で煌々と輝く白い電灯。下腹部からくる、例え様のない激痛。

そのあまりの激痛に、目の前がスバクしているように、チカチカしている。すると突然、ふつ、と、意識が遠のいていった…。

夢を、見ていた。

最初に視界に映ったのは、一人の男の人。私の一番大事なひと。

夫は何も言わず、ただ微笑んでこちらを見ていた。

私が夫の方へ歩み寄ると、夫は軽く手招きをして、走って行った。

私が走り寄る先には、小さな、小さなベッドが。

夫はベッドに手をかけ、覗き込んだかと思うと、再びこちらに手招きをした。

私は、幸せそうにこちらを見ている夫を見つめながら、走り寄った。

私が走り寄ると、夫は少し体をすらし、私が覗き込むように場所を開けた。

私はベッドの縁に手をかけ、そつと、ベッドを覗き込んだ…。

…次の瞬間、私が見たのは、以前と変わらない、白い電灯。

それと、心配そうに私を覗き込む、助産婦さんの顔。

そこで私は、気を失っていたのだと気づいた。同時に、先程までの激痛が戻ってきた。

でも、もう気を失ったりなんかしない。私が見た夢は、きつと、いつか見る未来だと思っから。

「…オギヤア」

…さっきまでの激痛が、嘘のように消えた。

ゆつくりと、目を開ける。

そこには、再び助産婦さんの顔が。さつきと違うのは、その表情には心配ではなく、笑みが浮かんでいるということ。

それと、両手でタオルを持っているというところだった。

助産婦さんが、タオルを私の目の高さを持つてきた。

すると、タオルから、ちっちゃなもみじが生えてきた。

何かを探すように動き回る、もみじのようになつちやな手。

私が手を伸ばすと、指を絡めるようにして握ってきた。

私は両手を伸ばして、その手を包み込むように、優しく、握り返した。

5年

D y i n g D i v i n g

この海域には軍艦が沈んでおり、ダイバーの観光スポットとして人気のある場所である。そして同時に、この沈没船の中に入ろうとするダイバーも後を絶たない。しかし深度の深さと入り組んだ内部構造、そして何よりも直接水面まで浮上できない天井の存在が、それを非常に危険な行為にしている。

俺が沈没船「日豊丸」に辿り着いたのは、大学生グループの一人がダイビングから戻らないと聞いてからおよそ十分後の事だった。

細かい堆積物が巻き上げられ、一メートル先も見えない酷い状態の船内。そこから遭難者を捜し出した時、俺のエア―残量は三分の二を切っていた。彼は自分のエア―をほぼ使い切っていたため、背負ってきたダブルタンクの一方を渡す。都合三分の一になったエア―で無事帰還できるかは、危ういラインだった。

ダイバーが消費するエア―の量は、熟練度によって2倍以上の差が出る。恐怖によって呼吸が浅く早くなっていたのである。彼は、まさに悪い典型であった。だがそれに気付けるほど、水の透明度も、俺の余裕もありはなかった。そして先導していた俺が船外へ出ようとする直前、彼のタンクの内圧は限界値を超え、エア―の供給が止まった。

俺がハッチから上半身を出したその時、突然右足を捕まれ、船内に引きずり込まれる感覚がした。咄嗟にハッチの縁に肘をひっかけて堪える。背後を確認し、彼がエア―切れを起こした事、そしてパニックに陥り必死に足にしがみついていることを知る。

どうしようも無かった。俺のタンクを彼にやる？無理だ。この深度から無呼吸で浮上など不可能、溺れるか肺が破裂するかのどちらかだ。できる訳がなかった。だが彼は尚強く足を掴んで放そうとはしない。自身もエア―が限界に近い俺には、その様を彼がタンクを奪おうとするようにすら感じてしまった。

時間がない。躊躇は出来なかった。生き残るのに必死だった。俺はハッチにかけた手をつぱり、自由な左足で彼を強く蹴る。踏ん張る場所の無い人間は、驚くほど簡単に突き飛ばされていく。そして彼の顔、恐らく絶望の顔を、振り返る事もなく一目散に水面に向け脱出する。

事故だった。そう自分に言い聞かせた。事実そうであったし、俺は出来うる限りの事をした。誰も、彼の両親さえも俺を責める事は無く、むしろ同情の言葉をかけられる事が多かった。だがそれでも、右足に残る感触に苛まれ、夢で何度も同じ光景にうなされた。今日もそうだった。目が覚めてベッドの上に居る自分を確認する。やっと眠れたと想ったらこれだ。汗で張り付いたシートが気持ち悪い。どうして俺がこんな目に遭うんだ。不公平じゃないか。そんな事をつぶやきながら、膝を抱えてうずくまる。忘れられる日は来ないだろうと知りつつも、時が解決してくれる事を待ちながら。

inoi

命

nei

命と書いて

めい

と読む

昔は命を掛けて果たすべきもののことを指した

武士は命をかけて敵と刀をぶつけ

兵士は命をかけて日本のために死んでいき

テロ組織は命をかけて聖戦に赴く

命のために

命が消える

命と書いて

いのち

と読む

あらゆるものに命は宿り

何かしらの使命を持って生きている

あらゆるものは死に向かって生きている

今 この文章を目で追う間も

今 ここで息を吸う間も

今 瞬きをした瞬間にも

死を知って命を知り

命を知って死を知る

めいも

いのちも

死があるために

生きてくる

ふと目をあけると、そこには焼け野原が広がっていた。たしか、草木が鬱蒼として緑にそまっていたはずだが、そのようなものはない。土の色がむき出しになり、しかも黒く焼け焦げていた。どうやら、野戦の最中、気を失ってしまっていたようだ。

良く見ると、焼け野原に人間の死体のごろごろしている。数多の戦場で敵を殺し、死体を見てきたが、今回は私たちの軍の遺体ばかりが目についた。ようやく私たちの部隊が全滅したのを知った。生き残ったわけではあるが、ここはもう焼け野原になつてゐる。何か食べられるものがなければ、いずれは餓死してしまう。野戦術で学んだことから、土を掘り起こし、幼虫をさがしたが、いない。食べられそうな植物や木の皮もなさそうであつた。やはり、駄目かと思つたとき、敵兵の死体に目が止まつた。そして、私にある考えが浮かんでしまつた。

——食べられるのか——

もう、数え切れないほど人を殺してきた私に、何をためらうことがあろうか。死体は宿していた魂を失つたただの肉塊に過ぎない。意識が朦朧としていた中、そう考えていた。いずれ蛆やら鳥やらによつて消えていくものであるのなら、私の手で——私はその死体の服を引き裂き、腹が見えるようにした。腐臭ではないが嫌な匂いがした。私は思わず鼻を抑えつけた。

右手に短刀を持ったが、手が震えている。人を撃つことも、爆弾を投げることも、銃剣で切ることもしてきたのに、手が震えていたのだ。震えて、短刀を振り下ろせない。手からの汗で、とうとう短剣が手から離れてしまつた。一体どうしてなのだ。何度試しても結果は同じだつた。目を合わせてしまうからかと思ひ、目をつぶつて思い切り短刀を振り下ろした。

いやな感触であつた。いや、正確には感覚といふべきなのか。そして、耳から伝わる切断音は、野戦で人を切るそれよりも醜い音であつた。まるで、頭の中を虫が蠢いているかのような、ひどい感覚だつた。そして、ゆつくり目を開けると、敵兵の腹に短刀が刺さつていた。そして、気が付くと、脱水症状も出ているというのに、涙が頬を伝つていた。一体何に涙を流しているのか。目の前にあるのはただの死体だというのに。

マッチをすり、敵兵の服を燃やして腹の肉を焼いた。そして、いざ口に入れようとすると、開かない。目を閉じて右手を使って口をこじ開けて入れた。そして、そのまま喉の奥へと入れた。味などどうでもいい、いや、舌が拒絶したのだ、人の味を。不思議な事に、横に居る腹の引き裂かれた無残な死体にはなんとも思わなくなつていた。それなのに、目からは涙がこぼれ続けていた。

その時、遠くから人の声がした。煙を偶然見た味方の後発部隊が来たのであつた。大丈夫かたずねられたとき、突然、おれは吐いた。吐き続けた。体の中からすべてを浄化しようとするかのよう。その時気が付いた。おれが涙していたのは私にだったのだと。五感の必死の訴えが分からなかつた。人としての尊厳を、そして、人からけものに成り果てることから守ろうとしていたのだ。気付くのが、遅かつた。おれは人としても愚かなことをしてしまつた。死んだ者に手を合わせるどころか、それを食べてしまつたのだ。おれは己の愚かさを悔み、皆が抑える中、気絶するまで、わけのわからないうめき声をあげ、のたうちまわり続けた。

その後の介抱で命をとりとめたが、おれの人としての生命は、あの時すでに終わつてゐる。

二〇〇九年十一月二十七日、通貨廃止法、寿命設定法、分兌換法、生命銀行法、及びその他関連法、総じて通称電子ライフ法が施行された。

成立前から現在まで、電子ライフ法は多くの議論を呼んでいる。カネという制度がなくなっただのだ。各自の貯蓄が一円Ⅱ一分に変換され、年齢に応じた余命と共に、新設された日本生命銀行の預命口座に振込まれた。国民は、既に導入されていたIDチップを用いて、自らの時間を使って買い物をした。カネに代わって、イノチが流通しはじめた。

もちろん、電子ライフ法の成立には反発もあった。しかし、国民の大部分は、誰もが平等に財産を得られるこの制度を歓迎した。

導入から十年を経た今、電子ライフは巨視的には成功を収めている。一方で、様々な問題も各地で発生している。今回はそんな一例を紹介しよう。

メイコ(仮名)は、電子ライフ法の施行時、十八歳の女子大生であった。

世間はライフバブルに湧いていた。メイコの場合、六十八年の寿命が付与された。円に換算するとおよそ四千万円。突然大金に相当する長寿を手に入れた彼女は、周囲と同じく、ブランド品を買い漁り、世界中を旅行し、贅の限りを尽くした。

しかし、しばらくすると大部分の人々が気付いた。時は金なり。残された時間は有限であると。やがて社会の混乱は収まり、法の狙い通り、人々は人生を充実して過ごし、働いた。どんな仕事でも、労働時間を購うのに十分な給暇が支払われた。

ところが、愚かな者は存在する。メイコもその一人だった。彼女は自分の預命が尽きかけると、生活保護を目当てに行きずりの男との子供を産んだ。娘の世話は疎かに、自分は密かに贅沢三昧を続けた。だが、ついに先月、娘の預命が大量に消費されていることが発覚し、児童虐待及び横領の容疑で逮捕された。

既に本人の預命が僅かであったため、裁判は迅速に行われた。判決は「二年の没収」。預命が尽きた人間の末路を捉えた映像がある。

『しわしわのババアになるまで長生きしたくもないな』って、欲しかったものみんな買いました。あのころは楽しかったなーみんなで遊べて。いつの間にかつるんでた奴ら、マジメになっちゃって。仕方ないから一人でシヨッピングしました。あるとき久しぶりに預命通帳見たら、もービックリ！余命一年！あわててダチに相談したら、子供がいいよって言われたんですよ。あたしの娘なんだからあたしが使ってもいいじゃない。ねえ、あいつ、預命十年くらい残ってたでしょ？五年くらいちょうだいよ、ねえ、死にたくない死にたくない死にたくない　　ブツッ

刑法改正により、刑罰が懲役や罰金から預命の没収となった。以降、日本の犯罪率は著しく減少している。

「以上、特集『電子ライフの今』でした。続いて今日の命運占いのコーナーです」

9年「十一月三十一日二十時三十八分」

無機質な機械音声が時刻を読み上げ、映像が現れた。最新の占い装置が映し出した映像には、水面に浮かぶ私の死体が映っていた。

「そんな……」

溢れ出す驚きと恐れに潰されそうになりながら、時計を見る。現在時刻は十二時半。残された時間は八時間。突きつけられた現実には、私は――

自分の死を受け入れることにした。この占い装置は絶対に正確だ。恐らく八時間後には私は屍をさらしていることだろう。残された時間で出来ることは何だろう。

私は最後に会いたいと思える数人の友人やこれまでお世話になった人々の顔を思い浮かべた。何人の人に感謝を伝えられるだろうか。

その日の夕方、天気は急変し、誰も予想しなかった急な嵐が訪れた。

皆に奇妙がられながら、お世話になった人に会い、感謝を告げてその日は過ごした。

中学の恩師に会ってきた帰り道、急な土砂降りに遭って占いの意味に気付いた。

時計を見て占いの時間が迫ったことに気付いたが、不思議と悲しい気分にはならなかった。嵐の中佇んでいると、やがて足元が川のようになり、足元をすくわれた。濁流に揉まれながら、私の意識は遠のいていった。

所詮は占いであると自分に言い聞かせることにした。最新の技術が使われているといっても、所詮は占い。噂されている正確性も、信じる人が多だけなんだろう。

私は一旦そう思うと、占いに不安になった自分が馬鹿らしくなってきた。そして結果を忘れると、普段の生活へ戻ることになった。

その嵐が訪れたのは、公園で友人達と遊んでいる時だった。急な土砂降りに、友人達と別れを告げると、家路を急いだ。

公園にあった湖のほとりを駆け抜ける時、ふと昼間の占いが脳裏をよぎった。結局外れたじゃないかと思った次の瞬間、私は横から受けた強烈な一撃で、湖に向かって宙を飛んでいた。私はバイクに跳ねられたことを認識することもなく、意識を失った。

とりあえず警戒することにした。いくら正確な占いでも、その予言にある場所に行かなければ外れるだろう。時間まで指定してあるのだから、今日一日警戒すればよい。

私は約束していた友人に電話をすると、今日遊ぶ予定だった場所を変えてもらった。元々予定していた公園には、湖があったのだ。

友人と予定を変更して集まったのは、カラオケだった。盛り上がり過ぎてきたころ、急に店員が飛び込んできた。

「外は大洪水です！」

避難してください！」

慌てて外に出ると、嵐の中、道は既に川のようになっていた。周りの人に従って避難しようと歩き出した時、後ろから友人の叫びが聞こえた。振り返ると、暴風に吹き飛ばされて、こちらへと落ちてくるカラオケの看板が見えた。

――逃れ得ぬ運命――

「次の方、お入りください」

コンコン

「失礼します。」

「お名前を確認します。須佐之男命さんで

スサノオノミコト

間違いないでしょうか？」

「はい、間違いないです。」

「それでは以前の職歴について

説明をお願いします。」

「定職にはついていなかったのですが…

全国を巡ってボランティア活動を行っていました。」

「具体的にはどういった活動を？」

「船通山で近隣住民に害を与えていた

突然変異と思われるハツ首の大蛇を

退治しました。」

「わかりました。それでは就職を希望した理由を教えてください。」

「恥ずかしい話なのですが…

母親から家を追い出されて…

どうせ働くならば人のためになりたい

と思ひまして…で、警官になろうと。」

「そうですか。それでは最後に一つ。

あなたが警官になった場合

どのような役に立てると思いますか？」

「えーつと……そうですね……

ああ！先ほどお話しした大蛇を退治した時

の話なのですが、大蛇の中から剣が出てきま

して、この剣を一振りすると周りの草を一気

に刈り取れるので草薙剣と名付けました。

クサナギノツルギ

私にはこの剣があるので、草むらでの搜索

を楽にすることができると思います！」

「…ありがとうございます。」

「ご退室ください。」

「ありがとうございます。」

須佐之男命 不採用

※銃刀法違反の疑い有り。要捜査。

コンテスト結果				
コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
まじょコメント				
01	球	3 pt	6 位	0 sp
		鉛球の不条理。 重さを基準にしたロジックが説得的でした。 レイアウトの巧さで、タイトルから本文へ、弾丸が迫ってくるようにも見え、コンパクトなメッセージともども、ずしりとインパクト大な今週の表紙です。		
02	願はくは旗の下にていま死なむ	1 pt	8 位	1 sp
		花の下、ならぬ旗の下。 真田兄弟のイメージではんなりと読みました。「花卉の代わりに血飛沫の舞う」なんて、うまいなあ表現。あいかわらず、と言うべきか、余韻ゆたかなハイレベルの仕上がりです。 特別賞：旗の下のポニョ 賞 from 顔文字班（がんばって時代劇を書いたところを評価） イチオシフレーズ：「花卉の代わりに血飛沫の舞う」「願はくは旗の下にていま死なむ」		
03	無限欲望社会	1 pt	8 位	2 sp
		デュルケームを援用した構成は、とてもいいアイデア！ うんちくとストーリーの両方が楽しめるお得パッケージです。 だけれども、結局、彼女の動機がこのままでどうにも良く分からなくて、ぎっしりのわりにもどかしい感が残りました。家族がかわいそう、なんてフロアの声もありましたが、佐藤マネージャーのナマのセリフが聞けると良かったかも。 特別賞：死にたくないんじゃないで賞か？ from Heart & Soul班（電波ジャックまでしてアピールしちゃってるあたり、本当は死ぬ気ないよね） 死なないで下さい 賞 from Die Zeit班 イチオシフレーズ：「ぎゃあああああああああ！ しんでやるうううう！」×3		
04	四人目	7 pt	4 位	1 sp
		おお、王道ベター直線の潔さ。ありがち夫婦視点のまんなか、たくちゃん視点を組み込んだのがユニーク。生まれてくる命の成長過程までちょっと見せてもらったような。 タオルからちっちゃなもみじが生えてくるなんて、細かな表現までとてもよく吟味されたハートウォーミングな力作でした。 直前の「ぎゃああ……」を振り切って、イチオシフレーズ大賞ゲットです、おめでとう！ 特別賞：フラゲしなくてよかったで賞 from 栃木県（夢を見ていた、は死亡フラグ。回収しなくてよかった） イチオシフレーズ：「…妹でもいいなと思った。」×3 「お怪我したの？」 「…（ふるふる）」		
		9 pt	2 位	1 sp

05	Dying Diving	映画を見ているような臨場感です。ダイビングについて、ていねいなリサーチに基づいて組み立てられているなど、安心感を持って読めました。堆積物が舞い上がって視界を遮るとか、しっかり知識がないと書けない描写ですよ。おめでとうシルバー・メダル!! みなさまもカンタンにゲームネタや夢オチにしまわず、この広い世界にはどんな不思議が存在しているのか、〈取材〉にも力を注いでくださいな。ネット取材で良いので。 特別賞：文法が危ういで賞 from 一網打尽（R）班（タイトルおかしくない？）						
06	命	<table><tr><td>0 pt</td><td>10 位</td><td>0 sp</td></tr><tr><td colspan="3">なかやすみポイントは漢字の両義性で。 イノチ、であり、メイであり。 人生の結末や意味についての哲学的なつぶやきでした。 答えが出ない問いだから、こんなふうにさらりと提示する手法もいいですね。</td></tr></table>	0 pt	10 位	0 sp	なかやすみポイントは漢字の両義性で。 イノチ、であり、メイであり。 人生の結末や意味についての哲学的なつぶやきでした。 答えが出ない問いだから、こんなふうにさらりと提示する手法もいいですね。		
0 pt	10 位	0 sp						
なかやすみポイントは漢字の両義性で。 イノチ、であり、メイであり。 人生の結末や意味についての哲学的なつぶやきでした。 答えが出ない問いだから、こんなふうにさらりと提示する手法もいいですね。								
07	手記：私が死んだ日	<table><tr><td>3 pt</td><td>6 位</td><td>1 sp</td></tr><tr><td colspan="3">うわぁ、ランチタイム前なのにつ！ でも、これでもかのグロテスク描写ではなく、心情描写メインなので、だいじょうぶだったか（何が？）。人間の根源に刺さる迫真の描写であることは間違いなし。深夜に読み返してみてください。 特別賞：レクター博士にご教授ねがいま賞 from 死ぬまでにしたいこと円グラフ班（理由は自主規制） イチオシフレーズ：「おれが涙したのは私にだった」</td></tr></table>	3 pt	6 位	1 sp	うわぁ、ランチタイム前なのにつ！ でも、これでもかのグロテスク描写ではなく、心情描写メインなので、だいじょうぶだったか（何が？）。人間の根源に刺さる迫真の描写であることは間違いなし。深夜に読み返してみてください。 特別賞：レクター博士にご教授ねがいま賞 from 死ぬまでにしたいこと円グラフ班（理由は自主規制） イチオシフレーズ：「おれが涙したのは私にだった」		
3 pt	6 位	1 sp						
うわぁ、ランチタイム前なのにつ！ でも、これでもかのグロテスク描写ではなく、心情描写メインなので、だいじょうぶだったか（何が？）。人間の根源に刺さる迫真の描写であることは間違いなし。深夜に読み返してみてください。 特別賞：レクター博士にご教授ねがいま賞 from 死ぬまでにしたいこと円グラフ班（理由は自主規制） イチオシフレーズ：「おれが涙したのは私にだった」								
08	おカネがイノチ	<table><tr><td>21 pt</td><td>1 位</td><td>1 sp</td></tr><tr><td colspan="3">ナイス設定！ なるほど寿命の金銭化ですか。社会を題材にしたキュートな思考実験でした。 もしこうなったら自分ならどうするかな？ そんなふうに読者さんが参加できるつくりになっているところ、とてもフレンドリーで、かつ伝わってくるものも大きいグレートな仕上がりです。 圧勝のゴールド・メダル、おめでとう!!（ついでに金賞@札幌、おめでとう!!!） しかし、こうなったらライフバブルになるかなあ？ 1年66万円、だからパソコン買ったら寿命が3ヶ月縮んじゃう、じゃあ要らないやとみんな寿命のほうを取りそうですが。そこがちょっと疑問。 特別賞：強制労働賞 from 呪いの五寸釘Q班（老人方はどーすんだ！）</td></tr></table>	21 pt	1 位	1 sp	ナイス設定！ なるほど寿命の金銭化ですか。社会を題材にしたキュートな思考実験でした。 もしこうなったら自分ならどうするかな？ そんなふうに読者さんが参加できるつくりになっているところ、とてもフレンドリーで、かつ伝わってくるものも大きいグレートな仕上がりです。 圧勝のゴールド・メダル、おめでとう!!（ついでに金賞@札幌、おめでとう!!!） しかし、こうなったらライフバブルになるかなあ？ 1年66万円、だからパソコン買ったら寿命が3ヶ月縮んじゃう、じゃあ要らないやとみんな寿命のほうを取りそうですが。そこがちょっと疑問。 特別賞：強制労働賞 from 呪いの五寸釘Q班（老人方はどーすんだ！）		
21 pt	1 位	1 sp						
ナイス設定！ なるほど寿命の金銭化ですか。社会を題材にしたキュートな思考実験でした。 もしこうなったら自分ならどうするかな？ そんなふうに読者さんが参加できるつくりになっているところ、とてもフレンドリーで、かつ伝わってくるものも大きいグレートな仕上がりです。 圧勝のゴールド・メダル、おめでとう!!（ついでに金賞@札幌、おめでとう!!!） しかし、こうなったらライフバブルになるかなあ？ 1年66万円、だからパソコン買ったら寿命が3ヶ月縮んじゃう、じゃあ要らないやとみんな寿命のほうを取りそうですが。そこがちょっと疑問。 特別賞：強制労働賞 from 呪いの五寸釘Q班（老人方はどーすんだ！）								
09	逃れ得ぬ運命	<table><tr><td>9 pt</td><td>2 位</td><td>1 sp</td></tr><tr><td colspan="3">3つの選択。けっきょくは一緒。レイアウトの工夫できれいにまとめていただきました。 そうだなあ、自分だったらどれにするかな、と読者を引き込む作りかたがこちらグッジョブ。 おめでとうシルバー・メダル!! 特別賞：運命は残酷で賞 from 音叉班（サンホラーイ！）</td></tr></table>	9 pt	2 位	1 sp	3つの選択。けっきょくは一緒。レイアウトの工夫できれいにまとめていただきました。 そうだなあ、自分だったらどれにするかな、と読者を引き込む作りかたがこちらグッジョブ。 おめでとうシルバー・メダル!! 特別賞：運命は残酷で賞 from 音叉班（サンホラーイ！）		
9 pt	2 位	1 sp						
3つの選択。けっきょくは一緒。レイアウトの工夫できれいにまとめていただきました。 そうだなあ、自分だったらどれにするかな、と読者を引き込む作りかたがこちらグッジョブ。 おめでとうシルバー・メダル!! 特別賞：運命は残酷で賞 from 音叉班（サンホラーイ！）								
		<table><tr><td>6 pt</td><td>5 位</td><td>2 sp</td></tr><tr><td colspan="3">重たいものだらけの今週、せめてラストは軽やかに♪</td></tr></table>	6 pt	5 位	2 sp	重たいものだらけの今週、せめてラストは軽やかに♪		
6 pt	5 位	2 sp						
重たいものだらけの今週、せめてラストは軽やかに♪								

10	ニートの就職奮戦記～警察編～	ニートだけど軽やかに♪ ミコトに行ったユニークさと、神話ネタ現代版の遊び心が楽しい逸品でした。 果たして彼が天職に巡り会える日は来るのか!?(続かない) 特別賞：癒されたで賞 from 命班（重くなかったから） 対応がてきとうで賞 from ミッフィー班（つつこめし!! 警察として銃刀法の説明せよ）
----	----------------	---